



「ひかり号」の利用風景。大きなかごを背負っている人もいる。大岩桂子さん提供

## 全国に広がった移動図書館

一人でも多くの人に本を届けたい。千葉では、戦後、移動図書館のサービスが早々に始まった。中でも1カ所に1時間程度停車して、各地を巡回する方法は「千葉方式」と呼ばれて全国に広がり、人々の知的生活を豊かにしていった。

「県の移動図書館『ひかり号』には登場歌があった。スピーカーから流れると、人だからできたものだよ」。市原市の農業富沢斎さん(88)は懐かしむ。1950~60年代、機械化を目指し、農業技術の本などを読んだ。「本で得た知識を元に化学肥料やコンバインを導入した。そのおかげで集落全体が変わった」

## 本を連れてきた「ひかり号」

きつかけは県立図書館長を務めた廿日出逸暉さんのアイデアだった。図書館不足の中、県立図書館の本を県内全域に届けようと、49年に進駐軍の払い下げトラック1台で開始。現在の市原市周辺から、範囲を広げていった。映写機を積んで、夜に映画会を催したこともある。父親がひかり号の運転手で司書も務めた、図書館研究者の大岩桂子さん(56)の話では当時は道が悪く、「パンクや故障もしょっちゅうした」という。

各地で評判になり、日本図書館協会によると、53年にはひかり号を参考にするなどして全国で計41台が整備されたという。

経済成長とともに市町村も図書館を構え、ひかり号は97年に廃止された。全国的には、地域の財政難などから移動図書館自体は減少傾向。だが、東日本大震災の後、東北では民間が移動図書館を新たに始める動きがあったという。

大岩さんは言う。「本を必要とする人々にあまねく届けたいと願い、考えつくことは、どんな時代も同じなんだと思います」

(波経理子)  
=おわり

## 千葉のチカラ

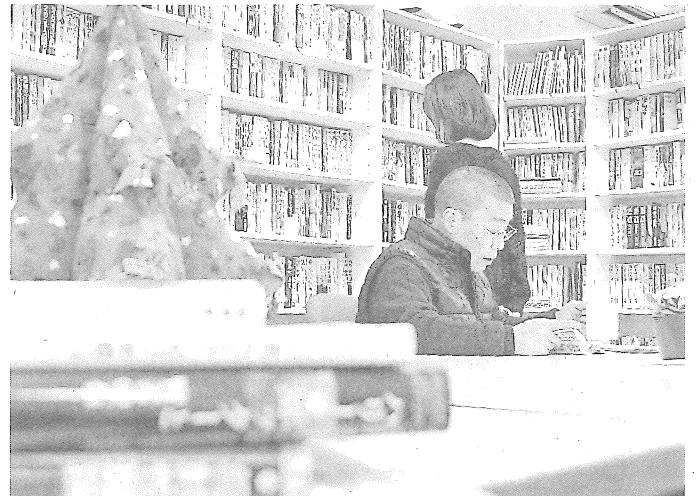
戦後70年

6

知

昔 今

## 空き店舗など活用 民間図書館



団地内の商店街の一角にある「袖ヶ浦団地まいづれ図書館」。会話を楽しみに寄る人も多いという=習志野市袖ヶ浦

# 人のつながり生む「居場所」

船橋駅近くの空き店舗にある民間図書館「船橋北口みらい図書館」で昨年12月6日午後、忘年会が開かれました。壁一面には約6千冊の本。約10人の男女が囲むテーブルには、料理や飲み物が所狭しと並んだ。飛び入り参加の男子学生は「紙の本の未来はどうなるんでしょう」。本などを巡るよもやま話は夜中まで続いた。

この図書館を運営するのは船橋市のNPO法人「情報ステーション」。本をきっかけに居場所をつくり、人ひとつながらうという考え方がある。特徴は「使い勝手の良さ」だ。駅の通路のほか、街中の空き店舗やバー、パチンコ店などにもあ

る。2週間借りられる本はどの図書館でも返却できる。子連れの利用も歓迎で、おしゃべりも原則自由。様々な分野の小規模セミナーを開くこともある。

情報ステーションは代表の岡直樹さん(30)が2004年に地元活性化を狙い設立した。図書館事業を始めたのは、知り合いから空きスペースの活用を依頼され、思いついたのがきっかけ。 「1号店」は06年にJR船橋駅の駅前ビルでカウンターに本200冊の規模で始めた。当初から利用者は一日20~30人いた。

「私もやってみたい」との申し込みが相次ぎ、徐々に拡大。在庫管理や本の入



近場に図書館が多くあれば、出歩く人が増えて社会での孤立防止に効果があると岡さんは見る。「多様な興味に応えられる図書館だからこそ、こんなに広がったのかも。人と人がつながることで、社会を活性化する知恵も生まれる場にしたい」



千葉の図書館  
日本図書館協会によると、県内の公立図書館数は155、移動図書館は12台、登録者は約213万人(2013年)。人口1人当たりの貸出数は5.5冊となっている。